二四　置毒[一]説は疑心暗鬼のみ

伽羅千代萩などと云ふ院本[二]には、伊達家の悪黨が殿の膳部に毒を入れて殿をなきものにし、そして悪黨の子息を跡に立てようと計畫んだ爲めに、乳母正岡が苦心し、其子千松が毒藥と知つて、わざとそれを喰べて母の眼の前で忠義の死を遂げたなどゝ書いてあるけれども、實際何等の根據もない、でたらめなうそ許である。尤も針程の話しに棒程の噂位はあつたのであつて、其時代兵部少輔一派の威勢が餘り強くそれを惡む餘り、所謂疑心暗鬼を生じて、毒殺の計畫などもあつたと信じたものもあり、段々言觸らすものもあり、それが事實の樣に書いたものもないことはなかつた。或本には、寛文六年十一月二十七日に龜千代君に御附の家來が殿にあげる御膳の鬼役（毒味をすることを云ふ）をした處が直ぐ死んでしまつた。これは怪しからぬ、確かに御膳に毒があるに相違ないと云ふので、直ぐにそれを足輕と二匹の犬とに食はした處が、これも亦忽ち仆れてしまつた。愈大變が起つたと兵部少輔と田村右京の處へ此の樣子を屆ける爲めに使者を遣つた。さうすると兵部少輔が其晩に熊田治兵衞と云ふ腹心の役人を遣して、殿は御匙[三]河野道圓幷に御膳番の役人を誅伐してしまつた。此時兵部少輔が一應の取調べをもしないで、遽てゝ關係の者を殺してしまつたのは、若し手間取つて調べが嚴重になれば自分たちの計畫も露顯するに違ひないと思つて、卽座に斯樣な果斷な取計をして口を塞いでしまつたのである。斯うしてしまへば所謂死人に口なしで恐ろしい陰謀も有耶無耶に葬られるからであると書いてある。しかし是れは全く作話のやうに思はれる。尤も河野道圓と云ふ醫者の殺されたことは事實あつた。しかし道圓の殺されたのは斯ういふことの爲めではなくて、他の罪狀の爲である。

一　置毒　毒を盛る事。毒殺。
二　院本　淨瑠璃本。
三　御匙　將軍または大名の侍醫。御典醫。

全體虚心平氣に其時代の伊達家の内狀を考へて見れば、毒殺事件などゝ云ふことはどうしても有りさうなことでない。其譯は、兵部少輔によしや己の子息市正を伊達の殿にしたいと云ふ陰謀があつた處で、其ために殿を毒殺することは彼にとつても誠に無益な勞であるからである。それはうまく其の計畫通り殿を毒殺した處で、其跡へ兵部少輔の子息が國主に坐られるか何うかは頗る疑問とすべき狀況であつたからである。たとへば兵部少輔は既に別家して居る一個の大名である。たとへ別家して居ないでも、兵部少輔よりも殿に血緣の近い親類は伊達家に多くある。卽ち綱宗の現在の兄弟には伊達式部宗倫があり、伊達左兵衞宗規があり、伊達肥前守宗房がある。これは皆義山公の子息であつて、龜千代の叔父にあたる人たちである。もし龜千代が亡くなつた時には、此等の近親の内で跡を繼ぐべき位置に在るものが幾人でもある譯なれば、兵部少輔の子の市正にお櫃の廻りさうなことではない。どちらかと云へば緣の薄い、しかも一藩をなして居る兵部少輔の子息を仙臺の國主にしようと内願をした處で、幕府が許さぬことは無論のことであらう。どんな平凡な人に考へさせても、此位の理屈の分らないことはあるまい。故に兵部少輔が龜千代を毒殺しようとしたと云ふことは恐らくは冤罪であらう。河野道圓の江戸屋敷で誅伐されたのは、毒殺などに關してゞはなくて別に其の譯があつたのである。

一體河野と云ふ匙醫は高等幇間と云つてもよい輕薄兒であつたらしい。それで役が役であつたから奥女中などゝも心易くして其機嫌を取り、奥向に評判の善いのを得意にして居た。奥女中と云へば何の世でも坊主同樣色中の餓鬼であるから、所謂女子と小人は養ひ難しと云つた樣に、少し綱を弛めるといつでも亂りがはしくなるのが常である。まして此時は殿は幼年であつたから取しまりも弛かつたことであらう。河野道圓と云ふ奴はかういふ奥女中と親しくして如才なく愛嬌をふりまき上手に立廻つて居た。そこで奥女中のうちでも上臈衆と云へば身分の高い女のことであるが、其上臈衆に鳥羽と云ふのがあつた。これは龜千代の護り役であつて、江戸の浪人柳田六郎左衞門重義の娘であつた。寛文十三年に年

十七であつたと云ふから、此時は四十六歳であつて、年から云へば大々的のうば櫻、寧ろばゝア櫻であつたに相違ないが、しかし色中の餓鬼であつて、若い時から男を知らない女であつたから、多分膩氣の多い、いやみの老女であつたらう。この鳥羽が或時河野道圓に案内され數多の奥女中と一所に舟遊びをして、夜更けまで酒宴を開いてさんざ遊んだことがある。其時には藩士の中で熊田市兵衞などいふ男も女中の中に加はつて、隨分亂りがはしいこともあつたらしい。多分こんなことは今度に限らず、毎度有つたのであらう。道圓が重い處分に逢はなければならぬやうになつたのは、斯様な不埒が露顯した爲である。さうして道圓父子三人は其爲めに首を切られてしまつた。隨分殘酷な處分のやうにも思はれる。それから鳥羽は其時に仙臺の大條玄蕃にあづけられ、道圓の妻と娘とは三澤賴母にあづけられた。此三澤賴母秀三といふのは道圓の娘の夫で龜千代の實母の弟である。それ故に道圓の罪が或人の信じた様に毒藥調合といふやうな事であつたならば、其説が必ず大條か、三澤か、左なくば殿の實母か何處かへ洩れて殘らねばならぬ筈である。さういふことのないのみならず、鳥羽といふ女も龜千代が成人されて後守役の往事を思ひ罪を許されて善い待遇をうけて居る。前後を合せて考へて見れば、鳥羽といふ女は一時の浮氣で道圓などに唆のかされ不埒な巫山戯をしたにもせよ、道圓と共に毒を置いて主人を殺さうなどゝ云ふ陰謀を持つて居たものとは思へぬ。

加之毒殺事件の虚であらうと思ふには積極的の證據がある。それは寛文八年七月十二日に幕府の侍の桑島孫六といふものゝ名で、兵部少輔一派を攻撃した書簡を田村右京亮まで出したものがある。桑島の先祖は仙臺の臣であつたが、故あつて、幕府に仕へるやうになつたもので、孫六は則ち其子孫である。其書簡には、渡邊金兵衞のやうな惡人の一派を威張らして置くのは甚だ宜しくないことを陳べたもので、其箇條の中に近頃金兵衞は小姓頭二人を増して頂きたいと云つて居るさうであるが、これは自分達の見込み通りに龜千代様を仕立てようとするのであらう、綱宗様の時代にも坂本八郎右衞門などゝ云ふ佞臣

があつて、御若年の綱宗様をそゝのかして放埒な殿様にしてしまつたが、今度も金兵衞の一黨が龜千代様を自分達の好きな様に御育て申すことになれば、御成人の上にも碌な殿様にはおなりなさるまい、その様なことをやつては甚だいけないと云ふことを痛論してあつた。その手紙の趣意は勿論強く兵部の黨を攻撃したものに相違ないが、しかし兵部の黨に毒殺の計畫があると云ふことを事實であると信じて居たならば、兵部の黨に殿を育てさせては殿が將來惡くなるなどゝ殿の將來を心配する必要がないではない乎。是は公論が敵に在るといふもので、兵部一派に對する彈劾書が却つて毒殺事件の虚談であつたことを反證して居るのである。猶ほ毒殺事件に關しては一の話がある。それは寛文八年八月一日に江戸で小姓役の鹽澤丹三郎と云ふものゝ死んだことがある。この鹽澤は元は原田甲斐の家來であつて、原田の肝煎で小姓役まで取立てられたものであつたが、其年の八朔[四]の祝に用ひる鱸の汁に毒を入れて殿に進めてくれと云ふことを原田から頼まれた。深恩の人の秘密を明かしての依頼であつて見れば拒絶する譯にも行かないが、しかし如何に恩人からの依頼であつても、殿を殺す反逆人の手傳をする氣にはなれないので、進退に究し、遂々自ら死を決し、其前の晩に母にそれとなく今生の別れになるかも知れないと云ふやうなことを諷して心の中で暇乞をした所が、母もその様子を察して今宵限りの親子の別れに、兩人ながら言ふに言はれぬ心を涙に表はして別れたが、鹽澤は果して其翌日出仕して殿に代り鱸の汁を飲んで死んでしまつたが、母も子を出してやつて自殺したと云ふ憐れな話である。併し是れは只だ一種の書物に書いてあるのみで、他の信ずべき多くの記錄にないことであるから、勿論虚構の說と思はれる。

四　八朔　陰暦八月朔日。農家ではその年の新穀を收めて祝ふ。